

## 「麻布十番 酉の市」 はじまりのお話



おとりさま、と言えば酉の市。縁起物の熊手を求める人で賑わう、翌年の開運を願う行事です。今現在、最も有名なものは浅草鷲神社の酉の市ですが、麻布十番でも大正十三年より酉の市が行われ、何と令和六年の今年はめでたく百周年となります。

さて、では何故麻布十番で酉の市が行われるようになったのでしょうか。その経緯が当社前身の末廣神社(戦後、合併して十番稻荷神社となった)から伝わる『末廣神社明細書』にあるのでご紹介しましょう。

大正十二年九月一日関東大震災ノ翌年十一月当社ニ於テ酉の市ヲ開設セリ 依ッテ酉の市及開設ノ理由ヲ述べ後世ニ伝ヘントス

と始まり、当時の末廣神社の社掌(現在の宮司に相当する)が大正十三年二月に氏子宅を訪ねていったところ、十番辺りに住んでいた東京府議会議員がたまたま居合わせて雑談となり、次の様なやりとりがあったと記されています。

**議員**「麻布にも神社を中心に何か人出のある催しを始めたら神社もよし麻布十番の商人も発展しはせぬか。何か良い考えはないかね」

**社掌**「それなれば無い事も有りません。末廣神社には昔より大鳥様の神さまが祀って在りますが酉の市と云うことを催して居ませんが此の市を始めたら如何です」

**議員**「其れは至極良い思いつきだ。今年の十一月から酉の市を始めたらどうだ。私が区役所警察署の手続きは致してやるから」

**氏子**「それは良い事で私も町内の方に話をするから」

三人は意気投合し、着々と準備が進みます。直接語られてはいませんが、大震災からの復興や景気付けとの意気込みもあつたでしょう。

関東大震災ニ八本殿(煉瓦造藏)及神楽殿八全潰シ拝殿、幣殿、社務所等八半潰ス

十番近辺は他所に比べ、震災の被害が少なかった(あくまで比較的)と言われてはいますが、神社は上述の通り大きな被害を受け、まだ仮殿も完成していない頃でした(大正十三年五月仮建築落成)。町の人々も相当の被害を受けたものと思われれます。しかし、人々の心は折れておらず、復興への道を歩み始めていたのです。

そして社掌は露天商の親分に出店の勧誘に行きますが、快い返事は貰えませんでした。

**親分**「先生、冗談云っては困ります。何が此の麻布十番で酉の市なんぞ開いたって人が出

るものですか。損を見込で専門の熊手屋が来るものですか。又露天商の者も出る者が有りません。御断り致します。若し一ヶ月遅れの十二月の酉の日になさるなら又考えても見ましょう」

**社掌**「それでは致し方がないから此の土地の鳶職や八百屋の人達が臨時に熊手屋を出店しても差支無いか」

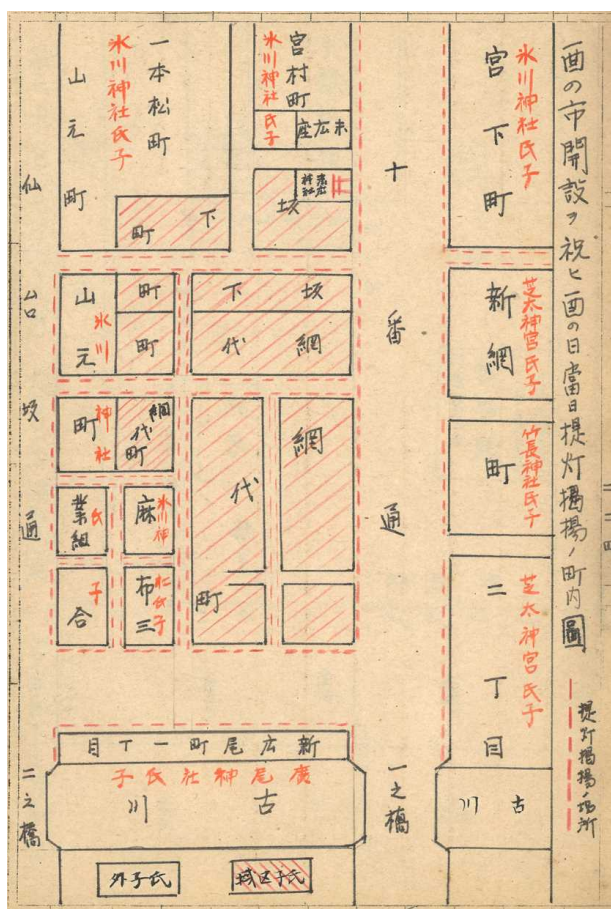
**親分**「結構です。どうか其の人達で店を出して下さい。私の方には異議は有りません」

と、露天商に馬鹿にされるように出店を断られたのでした。そうして地元の人達だけで酉の市を行う事になったのですが、社掌は不退転の決意で次の決議をします。

- 一、酉の市ノ全収入八神職ニ一任ス  
但 欠損アル場合モ亦神職ノ負担トス

損失が出た場合も全て神社が被るというのです。絶対に成功させるとの意気込みで臨んだ酉の市は

第一回ノ酉の市ハ予想外ノ人出ニテ午後十時二八全店ノ熊手全部売切レシ程ノ大成績ナリシカバ後二大松屋ノ子分達ハ親分ガ此ノ如キ重大ナル事ヲ世話役ニモ一言ノ相談モ無ク独断ニテナシタル行為ヲ怒リシモ跡ノ祭



と、露天商の鼻を明かすように、地元の人達との協力で全ての熊手が売り切れるという大成功を納めたのでした。

左は当時の酉の市提灯掲揚図です。末廣神社の氏子区域だけでなく、今現在麻布十番となっている区域の大部分が協力している事が分かります。まさに地域を挙げて酉の市に取り組んで、作り上げていったと言えるでしょう。

戦後、末廣神社は竹長稲荷神社と合併して十番稲荷神社となり、酉の市も当社が引き継ぐ事となりました。

昔より交通等の規制も厳しくなり規模も小さくはなりましたが、今現在も商店街との協力でバザールが行われるなど、地域と一緒に酉の市を行っているスタイルは変わらず続いています。

百周年の記念すべき佳き年に、皆様どうぞご参拝ください。